



テイテクレコード  
(ジュビリー)  
UP S-525-J  
¥2,000  
9月新譜



エディ・コスタ&ヴィニー・バーク・トリオ

- (1)ファッションエイティング・リズム (2)ユニゾン・ブルース (3)スウィート・アンド・ラブリー (4)レッツ・ドウ・イット (5)イェスタデイズ (6)パイル・ドライヴァー (7)イット・クッド・ハッペン・トゥー・ユー (8)ゲット・ハッピー (9)ジッパーズ・クリーパーズ

エディ・コスタ(p, vib) ヴィニー・バーク(b) ニックス・スタビュラス(ds) 1956年2月ニューヨークで録音

ピアノ、ヴァイヴ両刀の異才コスタがこの世を去ったのは1962年7月28日であった。このところMCAからヴァイピストとしてのリーダー・アルバム「ガイズ・アンド・ドールズ」が発売されたのに引き続いて、今回ピアニストとしての処女リーダーLPである本作品が紹介されることになり、10周年を迎えたのにふさわしい。ところでコスタの名を不朽のものにしたのは、1955年から58年に至るギターの名手タル・ファーローとのコラボレーションであり、その間、タルの名の下にヴァーヴに好演のいくつかを残しているのは御承知のことであろう。

そして57年には、批評家投票により、ピアノ、ヴァイブの両部門に新人のトップとして選ばれたほどその将来を嘱望された人であるが、特筆すべき彼の重要性はいかなるパターンやカテゴリーにはめ込むことも許されぬ、そのピアニストとしてのユニークさにあった。彼のスタイルの特徴はパーカッシブで一音一音まことに明確な硬いタッチにあり、オクターブ奏法と呼ばれた独特の動きは左手の柔軟性と相まって比類ないピアノ・スタイルを創り上げており、それに伴うに強力なスイング感があつた。これらの秀れた特質は56年2月に吹込まれたトリオとしてのデビュー・アルバムであるこのLPでも充分うかがい知ることができるが、なお、これを彼の音楽生活における代表作とするにはいささかのためらいがある。それは今日入手可能かどうか知らないが、かつてドットから発売された彼の最後のリーダーLP「青い灯の家」(House Of Blue Light)での彼の表現がわずかにこの3年後の作品とは信じ難いほど、より多彩となったテクニックに支えられつつ、遙かに心理的陰影に富んだ、あまりにも印象的な傑作だったからである。とはいえ、ピアノ・ジャズを愛する人にとっては、この作品もまたコスタの残した作品の一方のピークに位置するものとして、傾聴する価値はあろう。

(内田 修)

●録音採点: ★★★½ (岩崎)



ポリドール・レコード  
(ヴァーヴ)  
MV-2023  
¥2,000  
10月新譜



ジョージ・ウォーリントン・トリオとエディ・コスタ・トリオ

- (1)ピフォア・ダウン (2)チュニジアの夜 (3)イフ・アイ・ラヴ・アゲイン (4)ユア・ラフター (5)サラブレッド (6)ウィズアウト・リザベーション (7)モーニング・デュ (8)バスマンズ・ホリデイ (9)恋のチャンス (10)ゼアル・ネヴァー・ビー・アナザー・ユー (11)四月の思い出

(1)~(8):ジョージ・ウォーリントン(p) カーリー・ラッセル(b) アート・テイラー(ds) (9):エディ・コスタ(p) アーニー・ファータード(b) アル・ペルディエニ(ds) (9)(10):ロルフ・キューン(cl) ディック・ジョンソン(as)加わる

モダン・ピアニストの分野では、先輩パド・パウエルの存在があまりに大きすぎた結果が、ともするとこのウォーリントンをはじめとするポップ・ピアニスト達を単にパウエルの亜流として十把ひとからげにみる向きもあるが多分に食い意地の張っているボクなどは、こうした人達の演奏の中に微妙な味の違いを求め愉しむ性癖があるようだ。さて、このアルバムは日本で独自に編集されたもので、昔ノグランの10インチ盤で発売された54年吹込みのウォーリントン・トリオ8曲をA面に、57年のニューポート・ジャズ祭の実況(MGV-8237)からエディ・コスタ・グループの3曲をB面に収録してある。50年代の終りに突如ジャズ界から身を引いたウォーリントンと62年7月28日、自動車事故のため死亡したコスタは共に優れた才能を持つ白人ピアニストとして、また跡絶えた歌(うた)の持主としてとくに忘れ難い印象を残している。ウォーリントンのプレイはいうなれば趣味的の濃いピアノであつて、曲の解釈にしても、全盛期のパウエルが持つ激情性に代る優雅でしなやかなムードが魅力となつていた。もっともヴァーヴで再発された30センチ盤から除外されていた(2)や(6)を聴くと彼のテクニックがいかに卓越したものであるかわかるが、同時に(1)(4)(7)の持つ淡い抒情性はウォーリントンだけが持つ独自の世界である。エディ・コスタはヴァイブ奏者としても知られているが、やはりピアニストとしての腕前が抜群でパウエル風のホリゾンタル奏法に強烈なハンマー的手法を加味したユニークな個性はすでにタル・ファーローのアルバムで最高度に発揮されている。ここでは(9)のトリオ・プレイをはじめ、ロルフ・キューン、ディック・ジョンソンを加えたクインテットの(10)(11)が収められているが、それゆえに最後の2曲ではコスタ自身は引き立て役に廻っている。いずれにせよピアノ・ファンには嬉しい1枚だ。

(佐藤秀樹)

●録音採点: MONO★★★~★★★½ (菅野)